

本日はお忙しいところを、ようこそお参りくださいました。ごくろうさまです。今年もいつの間にか最後の法和会となります。

なぜ頭を下げるの？

ある住職さんのお話です。お経を読み御文を拝読し終わった時、若い人が隣りに座っていた年配の人に問いかけました。

「お経が終わってから、何でみんな頭を下げたの」

「御文さんは、頭を下げて聞くもんや」

「御文さんて、なんか知らんけど、頭を畳にすりつけるようにして聞かないかんのか？
本当は足のしびれをとるためにやっとするのじゃないの？」

「何を言っとする。昔からこうやってお参りすることになっとするんや」

この御文さんを、私達の先祖は大切に聞いてきました。

勿論、大切に聞いてきたわけですが、頭を畳にすりつける姿勢で聞くのではなく、軽く頭礼をする程度に頭を下げて聞いてきたわけです。

人間の知恵は頭が上がり、仏の智慧は頭が下がります。

人間の知恵とは、人間の方から未知なるものを学び、覚え、理解することであり、知識、教養、学問の世界です。そして知恵がつけばつくほど偉くなり、賢くなり頭が上がってきます。

しかし仏さまの智慧とは、仏さまの方から私を照らし、めざめさせ、心の闇を破ってくださる働きですから、仏さまの智慧に遇えば遇うほど、私の愚かさ、恥ずかしさ、罪業の深さに気づかされ、頭が下がるばかりです。

人間は知恵がつけば偉くなり、賢くなるので頭が上がり、仏法を聞く耳がなくなってきました。素直に仏さまの教えに耳が傾けられなくなります。

頭を下げないと、声は聞こえても、教えは聞こえません。だから、御文さんは、軽く頭を下げて聞いてきたわけです。

智慧というと、こんな話があります。知恵遅れの子の父親の話です。

知恵遅れというのは差別語です。本当は使わないほうがいいのですが、あえて知恵遅れという言葉を使います。

その父親のいつも言うこと、

「世間ではうちのような子を「知恵遅れ」と呼んでいる。しかし、この子は決して知恵おくれではない。この子の知恵は遅れていない。ただ普通の子とちょっと違った知恵を持っているだけなんだ」

その子には、お兄ちゃんと妹がいます。お兄ちゃんと妹は学校へ行き、いつもその子はお留守番です。

お兄ちゃんと妹が学校に行っているとき、その子におやつをあげても、絶対に食べないのです。お兄ちゃんと妹が帰ってくるまで待っています。お兄ちゃんと妹がそろると、その子は喜んでおやつを食べます。

ある日のこと、その日三人の子にケーキが二つしかなかったのです。それで、お母さんが、その子に一個のケーキをあげて、お兄ちゃんと妹にはもう一個のケーキを半分にして与えました。

ところが、その子は目の前に置かれた一個のケーキをじっと見つめたままです。どうしてもケーキを食べようとしません。そのときお母さんははっと気づいて、その一個のケーキを二つに分けて、半分をお母さんが食べ始めました。すると、その子も半分になったケーキを喜んで食べ始めたのです。

「世間の子はね、『お兄ちゃんのケーキは僕のより大きい』と比べる知恵は発達している。」

その子のお父さんが言うんですね、

「この子には、ケーキの大小を比べて損した得したと考える知恵はないかもしれません。それで、この子は知恵遅れとされるのですが、この子は『仏さまの智慧』を持っているのですよ。仏さまの智慧は、お兄ちゃんや妹がケーキを半分しか食べられないとき、自分はまるまる一個を食べてはいけないんだという智慧なんです。」

さらに、

「世間の子の持っている知恵は、『損得の知恵』ですよ。この子にはそれはないが、ちゃんと「仏さまの智慧」を持っています。だからこの子は、『知恵遅れ』じゃないんです。この子が遅れているのは、知識だけです。だから、この子のことを『知識遅れ』と呼んで下さい。」

損得の智慧

相田みつをさんの詩に、「そんなとくか 人間のものさし うそかまことか 佛さまのものさし」と言う詩があります。

人は心の中に、生きるための基準となる物差しをもっているといわれています。

桜井俊彦氏著書の『やわらか子ども法話』法蔵館出版の中に、『10円玉の話』というものがあります。

知的障害の子どもたちが入っているある施設で働いていたおじさんが、ひとりの子どもを呼んできて、財布から六枚の硬貨を出して言いました。

これは、一円玉、五円玉、十円玉、五十円玉、百円玉、五百円玉だね。好きなものをあげるから、どれか一つを選んでごらん、と。

おじさんは、五百円玉を選ぶを思っていたのですが、その子が選んだのは十円玉でした。

おじさんは、尋ねました。

どうして、十円玉を選んだの？

すると、その子はこう言いました。

これで、お母さんの声が聞けるから、と。

施設にある公衆電話は、十円玉でしかかけられないものでした。

その公衆電話で、お母さんの声を聞くことを、その子は、一番の楽しみにしていたのでした。

わたしたちは、お金の価値を、金額が大きいか、少ないか、で決めています。

でも、そのお金の価値では代えられない、心の価値をいうものがあります。

著書の桜井俊彦さんは、言っています。

五百円玉を選ぼうとするのは、わたしたち「人間の物差し」です。

損か得か、という比較の中でしかはかれない物差しを持って生きています。

しかし、十円玉にその意味を見つけるという物差しは、「仏さまの物差し」です。

あるご法座で講師の先生が、『なんでも鑑定団』というテレビ番組を取り上げていらっしゃいました。

そのお話を聞いて、それまで何の気なく、おもしろい番組だと思ってた私は考えさせられました。

ご存知のように、この番組では、蔵の中から古いものや珍しいものを持ち出して、鑑定する人に「〇〇〇円です」と値段をつけてもらいます。そして、それが高額ならよろこんで、安ければ、ため息です。

それが面白い。

けれども、鑑定と称して値段をつけているわけですね。ものの価値をお金という尺度(物差し)で測るわけです。

そして、その金額が高ければ「たいせつなもの」「すばらしいもの」になり、安ければ「粗末なもの」「どうでもいいもの」となります。

値段を決めることを値踏みといいますが、なんでも鑑定とは、なんでも値踏みという

ことです。

しかし、なんでも値踏み、つまり、お金という物差しで価値が決められるものでしょうか。

そのご講師は、戦前のセルロイドの櫛を大切にしている女性のお話をされました。

彼女は、子どもの時に母親と戦争中の空襲に遭いました。親子で炎の中を逃げ惑ううちに、焼けた柱が倒れてきました。

そのお母さんは身を呈してわが子を護もり、そして息絶える前に髪からはずして娘に手渡したのが、その櫛だったのです。

もし、この櫛を鑑定団に出したなら、どうでしょう？

「これは、たしかに戦前のものですが、べっ甲などの高価な材質ではなく、安物のセルロイドですね。はい、三千元。」

なんてことになるでしょう。

でも、その女性は三千元どころか、三百万円でも他人に売り渡すことはないでしょう。なぜなら、その櫛はその女性にとっては、母親の形見、いや母そのものなんですから。他人が何千円といおうが、何千万円といおうが、関係なく大切な宝物なのです。

こんなふうに、値段のつけられないものだってたくさんあります。

そんなものまで、なんでも鑑定、なんでも値踏み…です。

「なんでも」ですから、最後には自分の前にいる人さえも鑑定する（値段を付ける）かもしれません。

月給の多い旦那さんは高値がつくでしょうし、年をとるほど値下がりするかもしれません。

知らず知らずに、出会う人やその人のいのちにまで、値札をつけていく…。恐ろしいことです。『なんでも…』の場合は、その物差しの目盛りが、金額の多少ということになるのでしょうか。

とにかく、私たちはすぐに他と比べて、損得、あるいは好き嫌い、役にたつ、たたないという物差しで 他を分けへだてし、えらんでいます。

損得・好き嫌い・役に立つ、立たないというのは、自分にとってという自分の都合です。

私たちが心の中で持っている物差しの目盛りは、自分の都合です。

しかも、一人ひとりの物差しの目盛りは、生まれも育ちも違うので、バラバラです。世界共通ではないのです。

アナウンサーが、「今日は良い天気でした」と放送すると、よく苦情の電話がかかるそうです。

天気に良い天気、悪い天気はありません。雨が降った方が、雪が降った方が良い天気の場合もあります。

以前、京都でタクシーに乗った時、「今日は雨で嫌な天気ですね」というと、その運転手さんは、「私たちは雨の方が儲かって良い」と話していました。

また、今年の夏 電器屋さんは、「今年の夏は酷暑で嫌になるね」といわれ、「今年はクーラーが売れて売れて…」と話していました。

目盛りが違うと厄介です。

しかも、その損得の物差しの目盛りは、「自分の都合」ですから、まわりの状況によって伸び縮みするので、なお厄介です。

宗教研究家のひろさちやさんは、人間の物差しをゴム紐の物差しと表現されています。ゴム紐の物差しとはその時の気分や周りの状況によって、勝手に伸び縮みするものと仰っています。

自分にとって都合のいい人を見るときにはゆるゆるの目盛りとなり、少々のご事は許すことができ、はい合格となります。

反対に都合の良くない人をはかるときには厳しい目盛りとなり、ちょっとしたことも許すことができずに、はい不合格ということになります。

テストで「80点」をとれば、はじめは「いい点数」に思えます。

しかし、クラスの平均点が「80点」と分かった途端、その同じ点数が「あまりよくない点数」に変わるというのです。

本来「物差し」の目盛りの幅はどのようなときにでも一定でなければ、「物差し」としての役割を果たすことはできないのですが.....。

後半

同じ相田みつをさんの詩に

この自我

この我執

俺と一生つき合う相手

とあるように、私たちは 命終えるまで自我中心で、自分の都合で、人間の物差しで、他とを比べて、分けへだてし、えらんでいます。

ところが、厄介なことに、人間の物差しを振りかざして生きていることに気がつかない。

「正信偈」には、自分の物差しほど正しいものはないと思い込むことを傲慢（おごり・たかぶり）、その心で人や社会の出来事を判断していくことを邪見（よこしま・はからい）と示されています。

ある熟年の仲の良い夫婦のお話です。旦那さんの退職を記念に、二人でヨーロッパのツアー旅行に出かけました。

二人のは仲良く旅をしていました。森を抜けると、遠くにきれいなお城が見えてきました。旦那さんが、「きれいな赤いお城だね！」と声をかけました。すると奥さんが、「あなたの目 おかしいんじゃない！あれは、青いお城ですよ。」と答えました。「いや違う赤いお城だ！」「いや青いお城です！」お互い一步も譲りません。

先ほどまで仲良く旅をしていた二人は、ついにけんかを始めてしまいました。そんなとき、向こうからあわてて添乗員さんがやって来ました。旦那さん「添乗員さん！あそこに見えるお城は赤いお城ですよね」奥さんは「いえいえ、あれは青いお城ですよね」

すると添乗員さんは、「あれは赤いお城でも青いお城でもありませんよ。白いお城ですよ。あなたたちは、それぞれ赤と青の色眼鏡をかけているから白いお城が赤や青に見えるですよ」と言いました。

夫婦はあわてて色眼鏡をはずすと、きれいな白いお城が輝いているのが見えました。その後二人は仲直りし旅を続けたそうです。

色眼鏡をかけて、慣れてくると色眼鏡をかけていることを忘れてしまいます。

この色眼鏡は、自分の都合という「人間の物差し」です。

私たちはその目盛りが正しいものであると信じて疑いませんから、その物差しをたよりに生きています。

だから、比べて悲しめば自己を見失うし、 比べて喜べば他を傷つけます。
時には、争いになってしまいます。

この添乗員さんは、仏さまです。おっしゃっていることは、「うそか まことか 仏さまの 物差し」です。

仏さまの物差しは、損か得かということから一步も出ることができずに「人間の物差し」を振りかざして生きていること・「自分の都合という色眼鏡」をかけて、かけていることすら気がつかず生きている私たちの姿を気づかせてくれるのです。

仏さまの教えを聞き、仏さまに遇うということは、「白いお城」が見えずに、「赤いお城」や「青いお城」やと信じて疑わない・どこまでも自分中心の私の姿が知らされるのです。

物差しの話

ある所に、一人の若い女の人がありました。女の方は弱虫で臆病者でしたが、とても素晴らしい「物差し」を持っていました。

その物差しは計るものによって目盛の幅がコロコロ変わる不思議な物差しで、どんなものでも好きなように計れるのでした。

だから本当には何一つ正確に計ることはできなかったのです。

しかし、奇妙なことに、女の方は目盛の幅が計るものによって変わっているなんて、まったく気付いていなかったのです。

そのため、女の方はその物差しを絶対に間違いのない、この世で一番正しい物差しだと信じ込み、何よりも大切にしていました。

女の方は毎日得意になって、自分の目の前に現れるすべてのものを、この物差しで計りました。

食べ物、着る物、家、木や草や花、お日様、雲、風の音・・・でも、この物差しが一番役立ったのは人を計る時でした。

顔の表情、手足の長さ、髪の色から目の光、声の高低に至るまで、どんなところでも実に細かく計ることができました。

そしてその結果で、この人は、自分にとって都合のよい人か、よくない人かを定めることもできました。

その上、人と人とを比較して、善い人と悪い人、綺麗な人と醜い人、賢い人と愚かな

人、強い人と弱い人等、ずいぶんいろいろな分け方もできたのです。

この便利な物差しは、女の人に大きな自信を持たせてくれました。

だって、この物差しを持っている限り、たとえどのような難しい問題や困難な出来事にぶつかっても、うまく解決できると信じていることができたからです。

そのために女の方は、だんだん自分が弱虫で臆病者だったことを忘れてゆきました。

そしていつの間にか、自分はとても強くて賢い人間、この世で一番偉い人間だとまで思い込んでしまったのです。

さて、女の方はやがて優しい男の人とめぐり会い結婚しました。

そして二人の可愛らしい子どもが生まれたのです。子どもは、上が男の子で、下が女の子でした。

女の方はとても喜んで、それは大切に育てました。

「こんなに強くて賢い母親から生まれた子ども達ですもの、どんなにか立派な人になるのだろう」そう思うと、女の方はワクワクするのです。

ところが何年かが過ぎ去り、子ども達が大きくなるにしたがって、大変困ったことがおこりました。

男の子は元気は良いけれどすごいいたずらっ子で、一日中、村の中を走り回っていたずらばかりして歩くのです。

おまけに学校へ行っても勉強なんか少しもしないで遊んでばかり、女の方の言うことなんて聞こうともしません。

そして女の子といえば、生まれつき身体が弱くて、とうとう二度と歩くことも、しゃべることもできないだろうと言われるほど、ひどい病気になってしまったのです。

女の方はあわてました。

こんなはずではなかったと、子ども達を計ってみるのですが、何度計り直しても物差しの目盛りは、どうしようもない悪い子、弱い子、愚かな子だと答えるばかりです。

女の方は泣きました。人として生きる価値もないような子ども達を持った自分が余りにもみじめで、毎日泣いて暮らしました。

そして、とうとう生きてゆく自信も希望もなくしてしまったのです。

ところが、そんなある日のことです。

いつものように一日中、外を駆け回って元気に遊んで帰った男の子が、小さな妹を抱きしめて優しく頬ずりしながら「ただいま、ユキちゃん」と言うと、無邪気に笑う妹をしげしげと見つめながら、女の方にこう言いました。

「お母さん、ユキちゃんは奇麗だね。顔も、手も、足も、お腹だって全部奇麗だよ、ユキちゃんはお家のみんなの宝物だもんね。」

男の子の言葉は、まるで電流のように女の人の身体へ流れ込みました。

「本当に、そうだねえ・・・」そう答えながら、女の人は身のちぢむほどの恥ずかしい思いに襲われて、思わず二人を強く抱きしめました。

その時、女の人にははっきりと分かったのです。

自分が今日まで大切にしていた物差しが、実は、自分勝手な思いだけで作られた間違いだらけの「物差し」であったことが、そして、その物差しだけを正しいと信じていた自分は、この世で最も傲慢で愚かな人間だったのです。

二つの尊い宝物を、両腕にしっかりと抱きかかえた女の人は、夕日がキラキラと輝く窓辺に近寄りました。こんなにも静かで優しい景色を、今まで見たことがないと女の人は思うのでした。風がカーテンを揺らしながら、涙で濡れた頬をソツと手で過ぎた時、どこからともなく透き通った風のささやきが聞こえてきました。「私は私、あなたはあなた、ホラ、こんなに素敵に生きている、嬉しいね・・・」

(平野恵子『子どもたちよ、ありがとう』より)

いつでも、どんな時でも、自分は、物差しを使ってものを考え、他を判断し、行動しているのです。どうあがいても、この物差しから一歩も出ることの出来ない私たちなのです。

ただ、ありがたいことに、物差しを持つ自分の姿を確かに知ることが出来た時、人は同時に、物差しのない世界を知り、その世界に触れることが出来るのです。

では、仏様の物差しとはどのようなものでしょうか。

仏様の物差しは目盛りのない物差しではないでしょうか。

目盛りがないので人と比べることができません。

私達のいのちは他人とは、はかることができないいのちを頂いているのです。

それは、深さ、広さ、重さに際限のないいのちなのではないでしょうか。

郷ひろみ

MC 「ライバルは誰なのか?という質問なんですけれど・・・」

郷 「僕はある程度他人と自分を比較することがないんですよ。他人と自分を比較するという事は、すごく自分の中では、無意味な劣等感とつまらない優越感しか生

まれないと思っ ているんで、いつも、コレをやった自分とやらない自分では、どんな風に5年先〇年先が変わってくるんだらうなあって。自分の中での比較なんですよ。」

MC 「我々は、西城秀樹さんや野口五郎さんとどうしても比べてしまうんですが・
・。」

郷 「まあ逆に、皆さんが比べ始めた時には、たぶん三者三様のそれぞれの道を歩み始めてい たんじゃないかなあと思いますよ。」

MC 「だから、ライバルがどうこうとか、他人がどうこうとかじゃない。本当に郷さんは心がきれいな方なのよ。」

あるお同行・聞法の方が、「私が浄土真宗の教えで出遇っていちばん良かったことは、比べなくてもいい世界が見つかったことです」と話されていました。

人間は比べるから苦しむのです。比べなければ楽になります。私たちの幸、不幸も人と 比べて判断しています。比べて上だと思い上がるし、下だと恥ずかしいし、悔しいです。

しかしながら「人間の物差し」は価値観であり、世間を生きていく上ではなくてはならないものです。ですから、私たちは、それを捨てることは出来ません。

「人間物差し」を持たずにはいられない。

そうして持つことによって人を傷つけずにはいられない。

そうした私たちの本当の姿は、「物差しのいない世界」に出遭うことでしか気付けないのです。

浄土真宗では、この物差しのいない世界を、阿弥陀の世界、浄土と申しております。

浄土に目覚めなさいと、常に阿弥陀さまはよびかけておられます。

毎日の生活を「人間の物差し」ばかりで生きているということの中に、この物差しを破ってくださるはたらきがあるということが、大事だということでもあります。

私たちは、千手観音のように生きればいいんです。

千手観音像には、たいてい42本の手が付いているそうですが、どの手も、いろんな向きに伸びて、いろんなことをしていますね。

ですが、真ん中の2本の手だけは、身体の中心で合掌しているんですよ。

どう生きてもいいし、何をしてもいいんです。40本の手はね。

自分勝手な物差しをなくすことが出来ない私を、いつも照らして破ってくださるはたらきに出会っていたら、また本当に頭が下がるということが一回でも自分の中にあつたならば、そのことが大事です。

どうぞお寺に足を運んで、「仏の物差し」に耳を傾けてください。